

笠屋遺跡

多度津藩陣屋跡

平成 30 年度から令和元年度に多度津町内で実施した遺跡調査報告

2020. 3

多度津町教育委員会

序

今回調査対象となった笠屋遺跡と多度津藩陣屋跡は多度津町の四箇地区と多度津地区はそれぞれ多度津町の西部と北部に位置し、善通寺市や丸亀市とも隣接する地域です。

笠屋遺跡のある四箇地区は町内でも古代の条里制の痕跡が色濃く残り、さらに多度津金毘羅街道も縱断する歴史文化が今も色濃く残った地域もあります。笠屋遺跡の周辺では、近年ベッドタウンとして、宅地開発が多数行われるようになり、それに伴い、多くの確認調査が行われました。

また多度津藩陣屋跡のある多度津地区は江戸時代には多度津藩の政府や武家屋敷が置かれ、多度津港の起点として、商業が発展した古い町並みも残る地域あります。

今回は笠屋遺跡に関しては開発行為に先行して、遺跡の調査を実施しました。調査では溝状遺構の中から多くの遺物が出土し、そのことから弥生時代から古墳時代の集落遺跡としての様相が明らかになってきました。さらに多度津藩陣屋跡では、遺跡内容の確認のために絵図等で記されている当時の堀の痕跡が確認されました。

本報告書が、香川県の考古学・歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査を実施するにあたり、ご指導いただいた香川県教育委員会埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位並びに多大なご協力をいただきました発掘調査地所有者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査及び整理作業に従事くださいました関係者の皆様方に感謝申し上げる次第です。

令和2年3月
多度津町教育委員会
教育長 田尾 勝

例　　言

1. 本書は、多度津町教育委員会が平成30年度から令和元年度に実施した、多度津町内遺跡調査の報告書である。
2. 本書で報告する遺跡は笠屋遺跡（香川県仲多度郡多度津町大字庄字笠屋）と多度津藩陣屋跡（香川県仲多度郡多度津町大通り）である。
3. 発掘調査は多度津町教育委員会が調査主体となり、多度津町教育委員会教育課が担当した。
4. 調査にあたっては次の方々・関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県埋蔵文化財センター、善通寺市教育委員会、丸亀市文化財保護室
5. 報告書の作成は、多度津町教育委員会教育課社会教育係・白木 亨が担当した。
6. 報告書で用いる方位は指針方位で示した。標高は東京湾平均海面を基準とした。
7. 遺構は次の略号により表示した。
S P : 柱穴跡 SD : 構造遺構 SK : 土坑 SH : 穴住居跡
8. 挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
9. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位：m）である。
10. 土器観察表中、あるいは土層断面図内の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖 1992年度版』を参照した。胎土中の砂粒の「粗」は径4mm以上、「中」は0.5mm以上、「細」は0.5mm未満を基準とした。
11. 出土遺物の記述・年代観・観察表の作成については各市町担当者のご教示や、下記文献を参考にした。
「庄八尺遺跡」『県道多度津丸亀線道路改築事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会 2009
「丸亀城跡(大手町地区)」『高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会 2018

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査・整理体制	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 笠屋遺跡

第1節 概要	7
第2節 層序	8
第3節 造構と遺物	8
第4節 まとめ	14

第4章 多度津藩陣屋跡

第1節 概要	15
第2節 層序	16
第3節 造構と遺物	18
第4節 石積造構の変遷について	23
第5節 まとめ	24

第5章 五十軒長屋で採集された瓦について

第1節 概要	25
第2節 瓦について	25
第3節 まとめ	29
遺物観察表	30

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第16図 調査区位置図(1/3)	16
第2図 遺跡位置図	3	第17図 調査区土層断面図(1/40)	17
第3図 周辺遺跡位置図：笠屋遺跡	5	第18図 1区出土遺物(1/5)	18
第4図 周辺遺跡位置図：多度津藩陣屋跡 ..	5	第19図 1区石積遺構の断面図(1/40) ..	19
第5図 調査区位置図及び遺構配置図	7	第20図 1区遺構配置図(1/60)	19
第6図 調査区東壁断面図(1/40)	8	第21図 蓼堀想定位置図	20
第7図 SH01 断面図(1/40)	8	第22図 石積遺構2立面図(1/20)	20
第8図 SD01 断面図(1/40)	9	第23図 2区遺構配置図(1/200)	21
第9図 SD01 出土遺物①(1/4)	10	第24図 2区出土遺物(1/3)	22
第10図 SD01 出土遺物②(1/4)	11	第25図 3・4区遺構配置図(1/200)	23
第11図 SD01 出土遺物③(1/3)	12	第26図 石積遺構1と2の変遷模式図	23
第12図 SD01 出土遺物④(1/3)	13	第27図 五十軒長屋採集瓦①(1/4)	26
第13図 多度津藩陣屋跡位置図	15	第28図 五十軒長屋採集瓦②(1/4)	27
第14図 文化12年家中屋敷地図	15	第29図 五十軒長屋採集瓦③(1/4)	28
第15図 絵図等から推定した多度津藩陣屋 施設配置図	16	第30図 五十軒長屋採集瓦の刻印拓本 ..	29

表目次

第1表 周辺遺跡一覧	5	第3表 遺物観察表(多度津藩陣屋跡)	31
第2表 遺物観察表(笠屋遺跡)	30	第4表 遺物観察表(五十軒長屋)	31

写真図版目次

笠屋遺跡	図版7 1区 石積遺構1北半と2北半
図版1 SH01 北から	図版8 1区 石積遺構2南半
図版2 SD01 北から	図版9 2区 全景 北から
図版3 調査区全景 北から	図版10 3区 全景 北から
図版4 出土遺物①	図版11 4区 全景 北から
図版5 出土遺物②	図版12 出土遺物
多度津藩陣屋跡	五十軒長屋
図版6 1区 石積遺構1南半	図版13 採集資料

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は当町内において周知の埋蔵文化財包蔵地範囲内の地区で行った。その中で笠屋遺跡に関しては当該地において開発が行われる事を契機に遺跡の広がりを確認する上で、開発業者と協議の上で、掘削による構造の破壊の範囲が狭小であるため、工事立会を行った。多度津藩陣屋跡に関しては町内遺跡の内容確認のために確認調査を行った。それらの成果を本文中に収録した。

第2節 調査の経過

平成 30 年度の工事立会は多度津町教育委員会が調査主体となって、笠屋遺跡（平成 30 年 5 月 31 日から 6 月 11 日まで）と多度津藩陣屋跡（平成 31 年 1 月 10 日・令和元年 9 月 25 日～27 日）を多度津町教育委員会教育課文化財専門職員白木亨が実施した。

整理作業は平成 30 年 6 月 13 日から令和元年 12 月 26 日まで多度津町教育委員会で行った。



第1図 遺跡位置図

第3節 調査・整備体制

調査・整理体制は以下のとおりである。

平成30年度

多度津町教育委員会教育課

課長

社会教育係

係長

主任主事（文化財専門職員）

主事

臨時職員

竹田光芳

社会教育係

西山英希

白木 亨

辻 健太

濱田文惠

平成31年度(令和元年度)

多度津町教育委員会教育課

竹田光芳

西山英希

白木 亨

辻 健太

須田美由紀

笠屋遺跡の調査に関わった方々は次のとおりである。

発掘作業員：桑島和茂 甲野 博 鈴木正博 中西 昇

また実測作業において今井由佳氏、にご協力いただいた。

さらに整理作業では職場体験活動の一環として、遺物の洗浄と拓本を多度津町立四箇小学校の児童と多度津町立多度津中学校の生徒に協力いただいた。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

今回調査した2遺跡の立地は丸亀平野の北端部に立地する。

笠屋遺跡は土器川や金倉川、弘田川などの複数の河川の沖積作用によって形成された扇状地形の末端部で、笠屋遺跡は旧流路に挟まれるような微高地上に存在する。

多度津藩陣屋跡は丸亀平野の北端部に流れる桜川の河口部に展開する砂州上に立地している。

第2節 歴史的環境

今回調査した笠屋遺跡周辺の多度津町四箇地区では、古くは道福寺地区の西側にある中又北遺跡では縄文晩期の縄文土器を出土している。

弥生時代になると、普通寺市にもその範囲が含まれる桜川流域に三井遺跡があり、ここでは



第2図 遺跡位置図

弥生時代前期の遺構が確認されている。さらに中又北遺跡も弥生時代になっても集落は続き、弥生時代の終わりごろに笠屋遺跡が現れる。おそらくは庄地区から南の三井地区までの間にある微高地において弥生時代の集落が点在していたのではないかと考えられる。

古墳時代には隣接する白方地区で多くの古墳が造られ始めるが、特に古墳時代前期から中期にかけて古墳は四箇地区ではあまり造られていない。集落としては庄八尺遺跡、笠屋遺跡において集落の広がりが見られ、あくまでこの地域は古墳時代の段階では田園などの生産域として展開したのだろうと考えられる。古墳時代の後期になると、多度津山南麓部分に古墳が造られるようになる。その多くが円墳で、横穴式石室を持つ後期古墳が点在している。代表的なものは青木地区的宿地古墳がある。

古代以降になると庄八尺遺跡や三井鶴取遺跡では9世紀代の構状遺構が見られるようになり、平野の低位部において田園地帯が広がっていたと考えられる。古代後半頃になると道隆寺が建立され、堀江津が開かれることになるが、古代における住居、あるいは集落城の中心はまだまだ町城の西側にあり、町城の中心から東側にかけては、基本的には生産城として展開し、一部小規模な集落が展開していくようである。

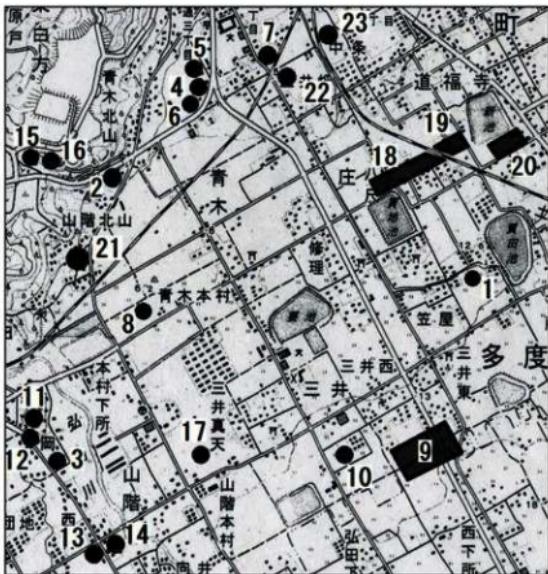
中世段階には塚ではないかと考えられるものがいくつも展開していくが、西側の香川氏の詰城である天霧城が最盛期を迎える時代で、普通寺合戦などの合戦場となった場所であるため、集落としての痕跡は低調である。合戦に関係する遺構としていくつもの塚あるいは墓が造られたのではないかと考えられるが、どの塚においても調査が行われていないため、詳細は不明である。また香川氏が多度津山を居城としたため、多度津町における中心部が移動することにより、さらに四箇地区的痕跡は生産域以外の痕跡はさらに低調なものとなる。

近世以降は西讃府志によると青木村・莊村・三井村・山階村に分かれ、多度津藩域に含まれる形となり、近代にそれら4カ村が合併して四箇村となり、現代において多度津村、豊原村、白方村と合併して多度津町になり現在に至る。

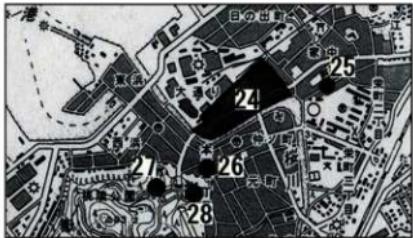
現在の多度津町は桜川を中心にして街づくりをしてきた江戸時代の多度津藩陣屋の影響を大きく受けているが、古墳時代以前の中心地はそこではなく、弘田川を中心とした町であったことが遺跡、特に古墳の多さから読み取ることができる。四箇地区も弘田川が流れ、上流から行き来する人々が望むいくつの村が古くからあったのではないかと考えられる。

多度津藩陣屋跡の周辺については遺跡そのものがあり確認されていない。その理由は当該地区が弥生時代以降形成されている砂州とその後背湿地が展開しており、生活環境としては適当ではなかったためと考えられる。古くは弥生時代後期の壺棺墓を出土している木下遺跡があるが、調査実績がないためはつきりしていない。現状確認されている遺物等からの推定では、一般生活中関わる遺構ではなく、土器棺墓などからなる墓域として利用されていたのではないかと考えられる。古墳時代・古代の遺跡は確認されておらず、中世段階になると香川氏の居城であった多度津城跡が多度津山の北頂部にみられる。この段階から、桜川河口域や沿岸部を港として利用するようになり、多度津の中心部が、白方や四箇地区から現在の多度津町北東部に集約され始める。

多度津城跡に関しては桃陵公園造営時の発破による地均しのために、当時の痕跡はほぼ皆無で、石段の一部が現代に残っている。遺構面の多くも削り取られているため、現状では柱穴1



第3図 周辺遺跡位置図：笠屋遺跡周辺(1/ 20,000)



第4図 周辺遺跡位置図

多度津廢墳跡周辺(1/20,000)

番号	遺跡名	遺跡の概要	
		時代	形態・種別
1	笠置遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	包蔵地
2	宿地古墳	古墳時代後期	古墳(横穴石室塙)
3	桑木古墳	古墳時代	古墳
4	綱盛塚	中世	塙(墓)
5	水神塚	中世	塙(墓)
6	願成寺	中世	寺院
7	いかり塚	中世	塙(墓)
8	田中大明神	中世	その他
9	三井遺跡	弥生時代前期	包蔵地(集落)
10	三井鶴鳴遺跡	古墳～中世	集落
11	篠葉堂跡	中世	寺院
12	舟岡山遺跡	弥生～時代中期～後期	包蔵地(集落)
13	西村1号墳	古墳時代	古墳
14	西村2号墳	古墳時代	古墳
15	来付1号墳	古墳時代	古墳
16	来付2号墳	古墳時代	古墳
17	泉屋敷跡	中世	城館
18	庄八尺道路跡	弥生・古墳・古代・中世・近世	集落
19	中又北道路	弥生	集落
20	中又道路跡	弥生	包蔵地(集落)
21	公徳寺跡	中世	寺院
22	五段岡碑	中世	その他
23	觀音堂跡	中世	寺院
24	多度津瀧屋屋跡	近世	城館
25	鬼塚	中世	塙(墓)
26	木下遺跡	弥生～時代	包蔵地
27	野津古塚	中世	塙(墓)
28	多度津城跡	中世	城館

表1 周初遺跡一覽

基のみ確認している。またこの段階の塚あるいは墓が2か所確認されているが、調査実績がないため、内容は定かではない。

近代、特に江戸時代後期になり、多度津藩主が直接城内運営をしていく際に、多度津藩陣屋が造られる。この段階でほとんど利用されず、墓域となっていた現在の家中や大通りに御殿などの政庁、家臣団の住まう武家屋敷を構築していった。

近世段階では政庁のあったあたりに讃岐鉄道の線路や国鉄の多度津工場が造られ、土地利用が大きく転換していく。

参考文献

「西白方瓦谷遺跡」『県道津丸亀詫間豊浜線(多度津西工区)緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報

告』香川県教育委員会 2012

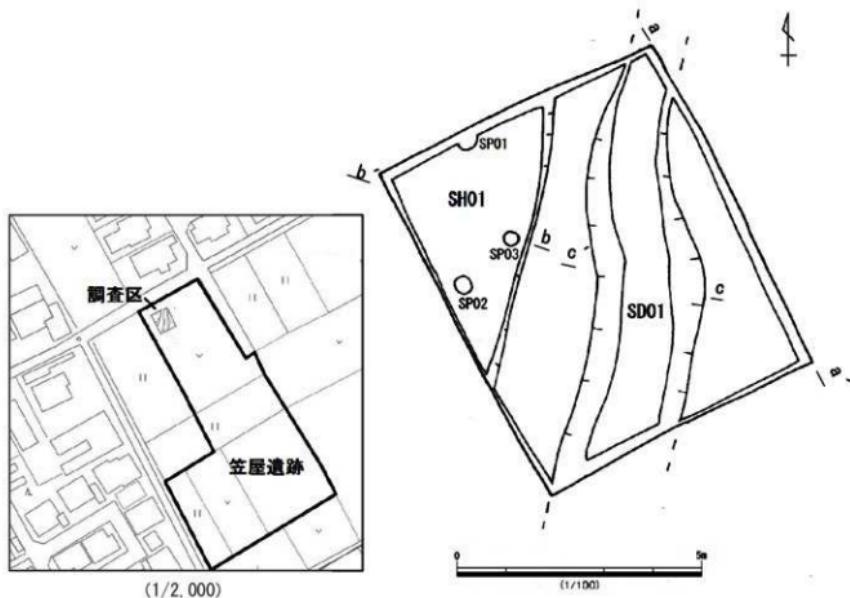
「南鶴遺跡」『平成 24 年度多度津町内で実施した遺跡調査報告』多度津町教育委員会 2014

第3章 笠屋遺跡

第1節 概要

笠屋遺跡の立地は北側約300mのところに庄八尺遺跡や中又北遺跡があり、南西部には三井遺跡など、複数の周知の埋蔵文化財包蔵地に囲まれるような位置にある（第3図）。平成30年3月に実施した試掘調査で埋蔵文化財の包蔵が確認されているため、開発のタイミングにあわせて立会調査をすることとなった。ちなみに平成17年度に庄八尺遺跡、平成27・28年度に中又北遺跡を香川県埋蔵文化財センターが発掘しており、庄八尺遺跡からは弥生時代～中世までの遺構・遺物を検出しており、中又北遺跡からは縄文時代晚期の遺物も出土している。

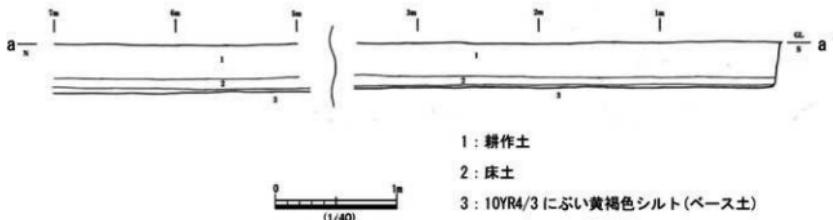
調査は遺跡の北側に設定し、耕作土を除去し、下位の床土層が削平されている箇所を調査区として、遺構は竪穴住居が1基と溝状遺構1条を検出した（第5図）。



第5図 調査区位置図及び遺構配置図

第2節 層序

調査区の堆積状況は第6図のとおり、地表下0.30m程度の耕作土が覆っている。その下層に厚さ0.05~0.10mの床土が確認された。その下層がにぶい黄褐色のシルト層になりその上面に遺構を確認する事ができた。また度重なる耕作によって遺物包含層は調査区内においては確認できなかった。



第6図 調査区東壁断面図 (1/40)

第3節 遺構と遺物

SH01

竪穴住居は調査区内北西部に検出した(第5図)。遺構上面は耕作によってほとんどが削平されている。遺構内に柱穴は3基確認したが、検出位置から住居に関係するのはS P 01と02の2基であると考えられる。埋土は1層



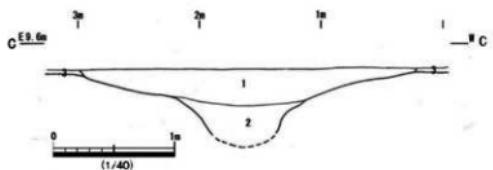
第7図 SH01 断面図 (1/40)

(第7図)で、また貼床、焼土等は確認されなかった。遺物は埋土中から土器片が出土したがほとんどが小片であるため、図化に耐えうるものがなかった。出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭の所産であると考えられる。

SD01

溝状遺構は調査区の北東から南西に向けて伸びる1条を確認した(第5図)。この遺構も遺構上面は耕作による削平を受けているが、確認できる残存幅は2.8m程度、深さは少なくとも0.6m以上になるとを考えられる。また今回の調査の出土遺物の9割以上がこの遺構から

出土している。また断面図（第8図）では2層に分層しているが、包含する出土遺物の時期的差異はほとんど無く、上層に古墳時代前期の土師器が含まれるが、下層は多くは古墳時代初頭のいわゆる古式土師器が多くを占め、一部弥生後期以降の弥生土器片も確認できる。



- 1 : 10YR2/3 黒褐色シルト SD01 埋土上層 土器多く含む
2 : 10YR3/1 黒褐色シルト SD01 埋土下層 第2層より砂疊多く含む。
土器多く含む
3 : 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト ベース土

第8図 SD01 断面図 (1/40)

出土遺物は次項からの第9~12図に記す。

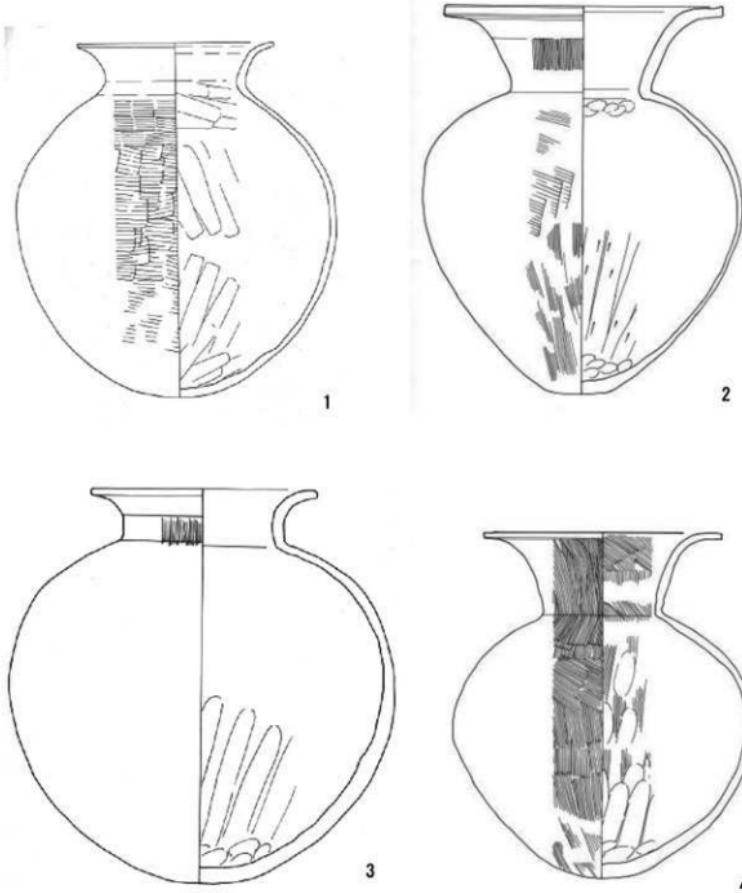
1~6は壺である。種類としては土師器、特に2から6はSD01埋土の下層より出土した土師器で古墳時代初頭の所産であると考えられる。3は形状が大きく異なるが、2・4・5は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、底部はやや尖底状になっている。施文は皆無で、外部調整はハケ目のみのシンプルなものである。1のみ通常の土師器で他のものより時代は進む、出土したもの SD01 埋土上層からの出土である。そのため SD01 の埋没時期は古墳時代前期段階以降ではないかと考えられる。7は小型丸底壺で器壁に二次焼成の痕跡が見られる。8はやや小型の壺である。

8~16は小型の甕である。小片も含めSD01の今回検出した場所においては比較的多く出土している。10・12・13・14・15・16は形状を同じく、尖底で緩やかな口縁の立ち上がりが見られる。

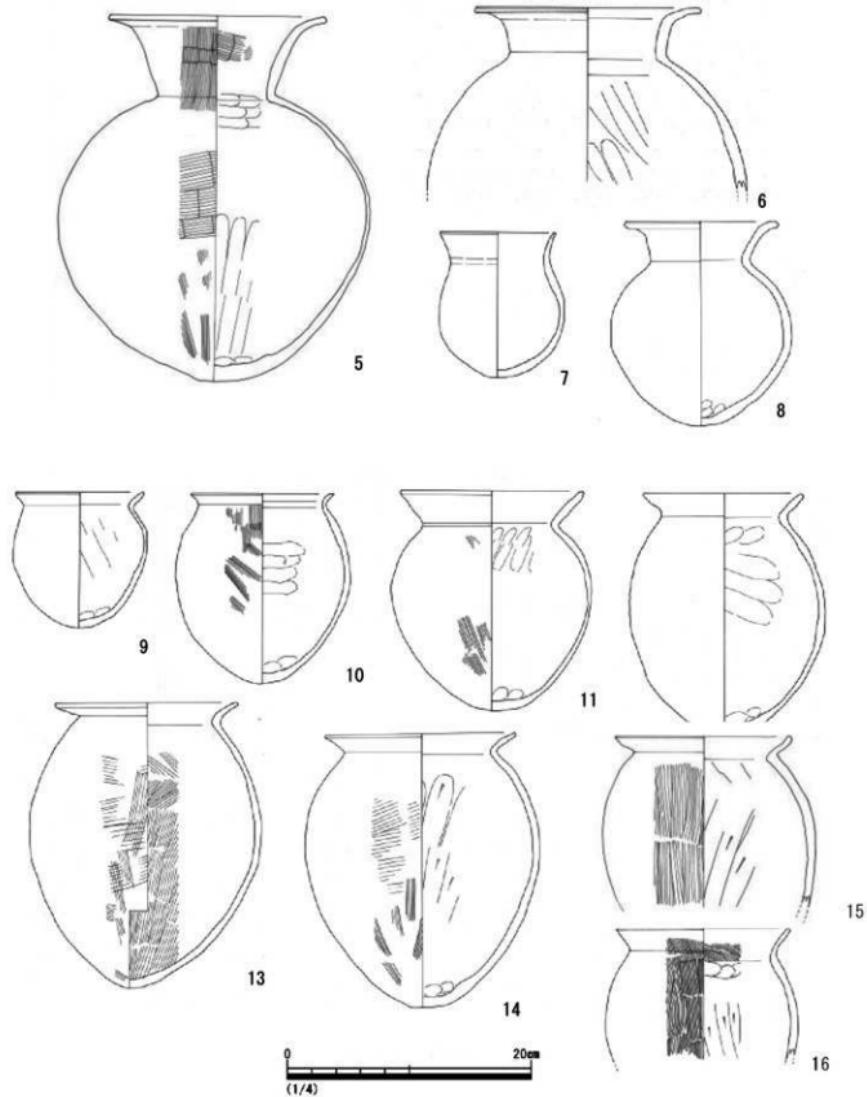
17はミニチュア土器である。今回の調査区内で1点のみ出土したもので、遺構の埋土の下層より出土した。甕形を呈しており、風化が激しく、特徴は捉えにくいが、同一形状のミニチュア土器が周辺遺跡でも確認されており、弥生時代終末期から古墳時代初頭の所産ではないかと考えられる。

18は小皿である。19・20は高杯である。特に20は小型の個体で、17や21の器台と合わせて、祭祀に用いられる供獻具であるため、笠屋遺跡が生活だけの場ではなく、調査区周辺には祭祀を行う何らかの施設があったのではないかと考えられる。

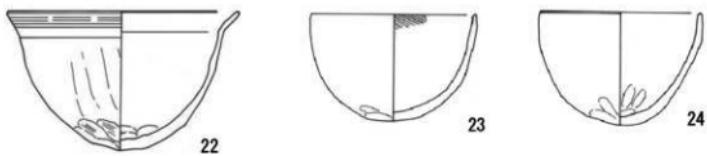
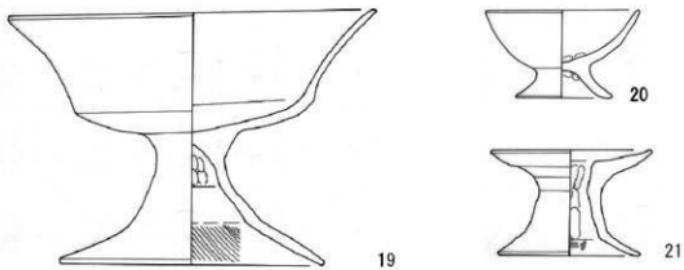
22から29は鉢で丸底砲弾形小型の鉢である。23・24・25・26は口縁部が外反せず、22・27・28・29は口縁部が緩やかに外反する。特に29は比較的大型の鉢で、底部に焼成前穿孔が施されている。これも祭祀用であると考えられるため、先ほどのミニチュア土器や、高杯、器台と合わせ、祭祀用の土器が出土しているのはこの遺跡の特徴を表しているといえる。30~37は浅鉢である。基本的には古墳時代前期ごろの所産であると思われるが、30はやや時代が新しいものである。形状は基本的には丸底であるが、30・31・33はやや尖底気味の底



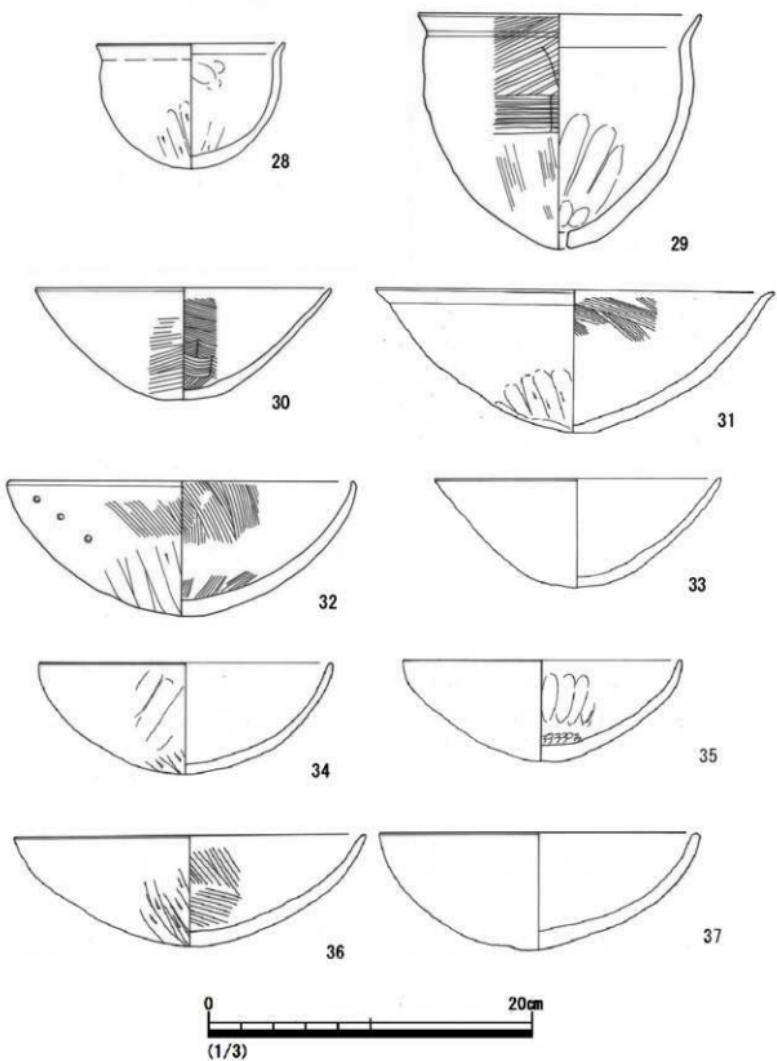
第9図 SD01出土遺物① (1/4)



第10図 SD01出土遺物② (1/4)



第 11 図 SD01 出土遺物③ (1/3)



第12図 SD01出土遺物④ (1/3)

部である。調整は内部に強めのハケ目を施すものが多い。

遺物に関しては総じて古墳時代初頭を中心とした土師器が大勢を占めている。遺物から見てもSD01は古墳時代初頭を中心とした遺構であるといえるだろう。

第4節　まとめ

今回調査した笠屋遺跡の範囲には2つの遺構のみ検出されたが、この遺構は県内でも確認できるV字に掘り込まれた弥生時代後期以降の溝状遺構ではないかと考えられる。用途としては調査区の範囲が狭いため、他の遺跡で想定されるような上流部からの導水設備として用いられているかは確認できないが、現況の地形からも微高地が北西に向かって拡がり、南東に向けて低位部が拡がっており、調査区は北西部に広がる微高地の南東端に位置すると考えられる。そのためこの溝状遺構を環濠とまでは言い切れないが、この溝状遺構は少なくとも微高地と低位部の境界溝のような役割を担っていたのではないだろうか。

この遺構をそのように判断するのであれば、今回調査した調査区は周知の埋蔵文化財包蔵地である笠屋遺跡のなかでは北端に位置しているが、遺跡の南側は先述したように低位部、微高地の外にあたるため、本来の集落の広がりの中で集落の南東付近の端部を示しており、集落の中心は北西に向けて広がっていくのではないかと考えられる。さらに言えば遺跡の北部には、同時期に係る庄八尺遺跡なども広がっていることから今回の調査区を南端として北側に向かって集落群が点在しているのではないかと推定できる。

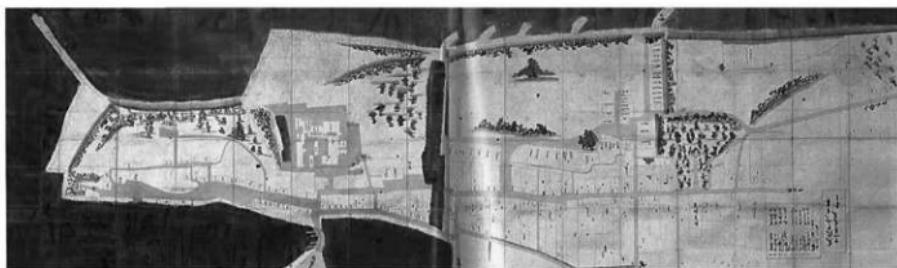
第4章 多度津藩陣屋跡

第1節 概要

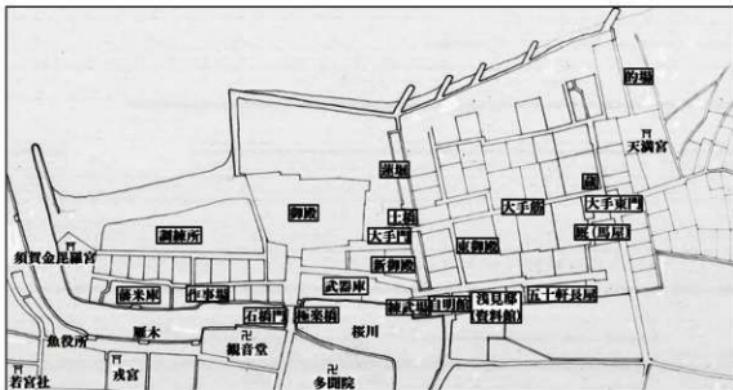
確認調査の対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「多度津藩陣屋跡」内にある（第13図）。調査場所は文化12年作成の絵図（第14図）上や文書等の記録から陣屋の施設の配置を推定している（第15図）。今回多度津町町内遺跡確認調査の一環で遺構や遺物包含の状況を確認することとなり、推定した位置図のなかで蓮堀や御殿、武器庫があったと想定されている場



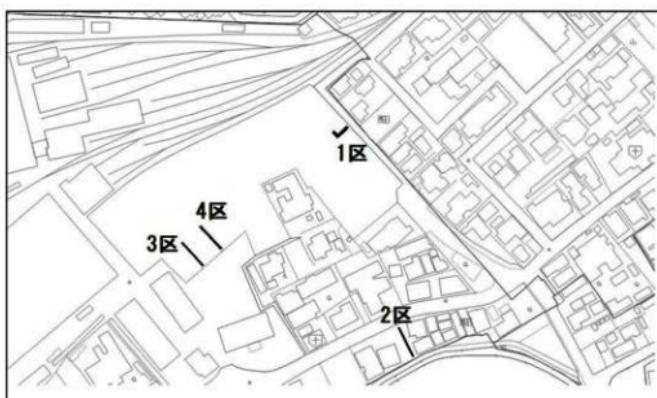
第13図 多度津藩陣屋跡位置図



第14図 文化12年家中屋敷地図



第15図 絵図等から推定した多度津藩陣屋施設配置図

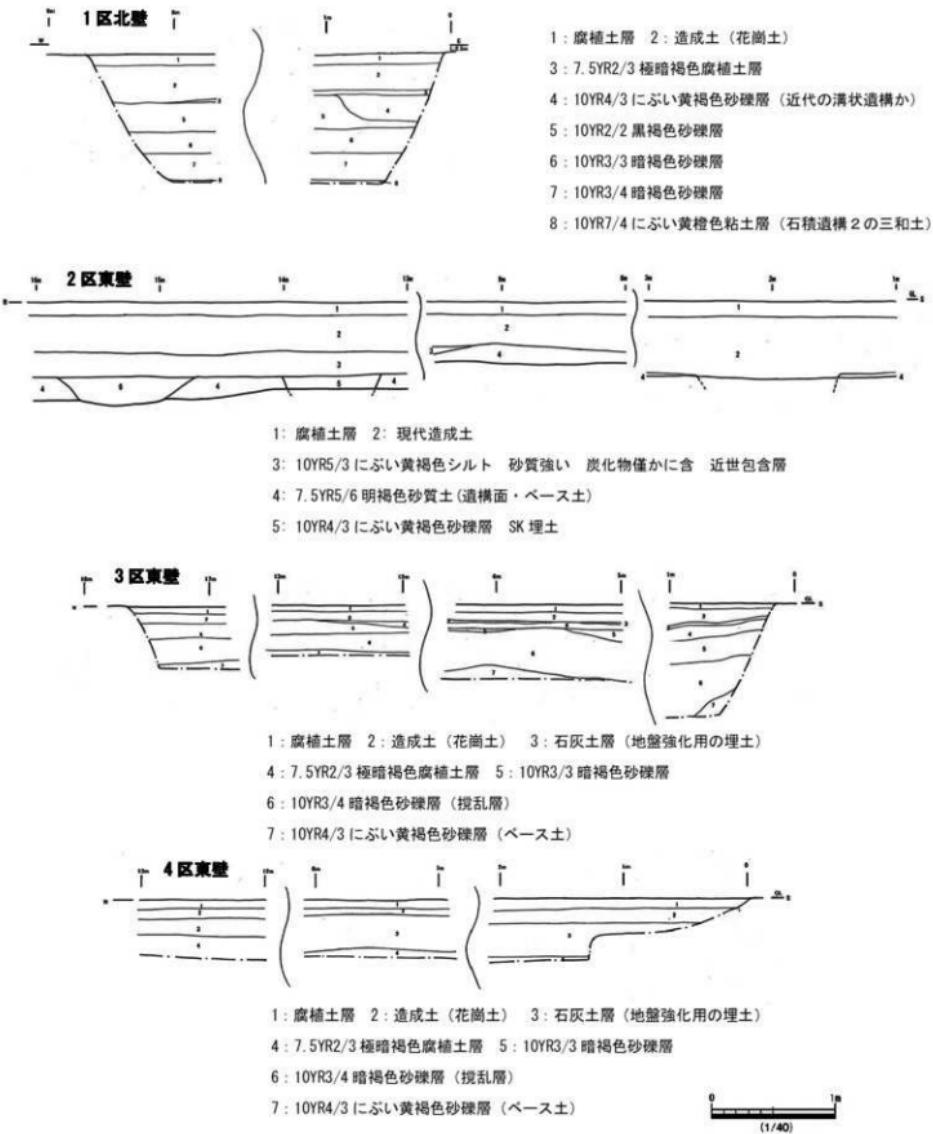


第16図 調査区位置図

所を確認することになり、調査区を4箇所に設定し、トレンチ調査を行った。(第16図)。

第2節 層序

1区は蓮堀があると想定されている場所で、堆積状況は地表面から腐植土が10cm被覆し、下位に大正～昭和時代の造成土が20cm被覆している。さらにその下位にそれ以前の表土と思われる極暗褐色の腐植土層が5cm、その下位にはトレンチ東端部に近世の溝状遺構らしき堆積が見られたが、埋土中に遺物は含まれていなかった。その下位に黒褐色や暗褐色の造成土が続き、その下に蓮堀に使用したと思われる石材を検出した。



第17図 調査区土壌断面図 (S: 1/40)

2区の堆積状況(第14図)は地表面から腐植土が10cm被覆し、下位に大正～昭和時代の造成土が30～50cm被覆している。調査区南側には確認されてはいないが、調査区北側にはその下位に20cm程度の遺物包含層を確認した。この包含層は明治時代に陣屋が取り壊された際に埋没した物であると考えられる。その下位に遺構を検出した。調査区南側が河道で、調査区中ほどに砂州のピークがあるため、遺構面はトレンチ中央部が地表下35cmから南北にかけて地表下60cm程度まで下がっている。遺構面以下の下層は堆積した砂層が続く。

3区と4区の堆積はほぼ廃土によるものに覆われていた。搅乱層の下位に遺物包含層は残っていないかった。搅乱層の下位にはベースである砂質の強い砂礫層が続くのみである。

第3節 遺構と遺物

遺構は1区で溝状遺構に関わる石積遺構2基、2区で柱穴3基、土坑3基、溝状遺構1条、3区では礎石状の石材、4区では柱穴を確認した。

1区

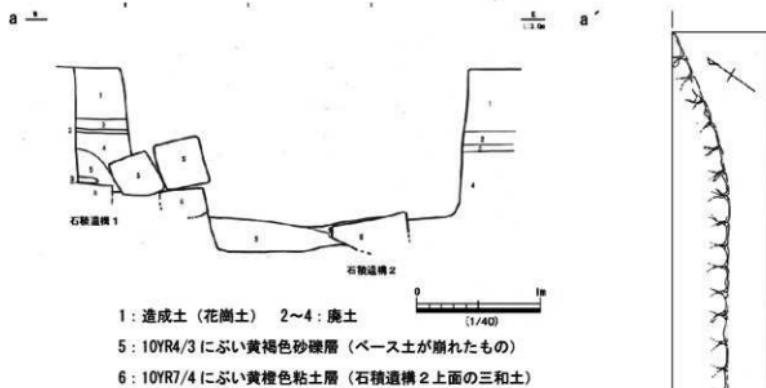
石積遺構1(多度津藩陣屋蓮堀)

検出場所、設置状況とともに多度津藩陣屋蓮堀の石垣の石積に用いられた石材であると考えられる。今回は掘削範囲が狭小であるため、出土した石材の多くはトレンチの南北に渡って続く、蓮堀の西端部が後に造成された際に崩されたものと後世に先行する石積の一部を転用して造られた何らかの水路跡が検出したのみであると考えられる。しかし西側に入れたサブトレンチによって一部残存する石積の痕跡を確認した。検出した石材の下位を確認してみたが、それより下には石材は確認されなかった。堀の幅は既出の東側の石積から測ると水平距離で約16mの幅があり、蓮堀の幅が当時の尺度で9間幅の堀であったと考えられる(第21図)。石材は花崗岩で打込接のブロック状の石材を利用している。石材の積み方に関しては、多くが原位置から動いたものであるためはつきりしないが、おそらくは布積であったのではないかと考えられる。堀の深さに関しては断面図と現況の蓮堀東壁の上端のレベルから約2m程度であると考えられる。

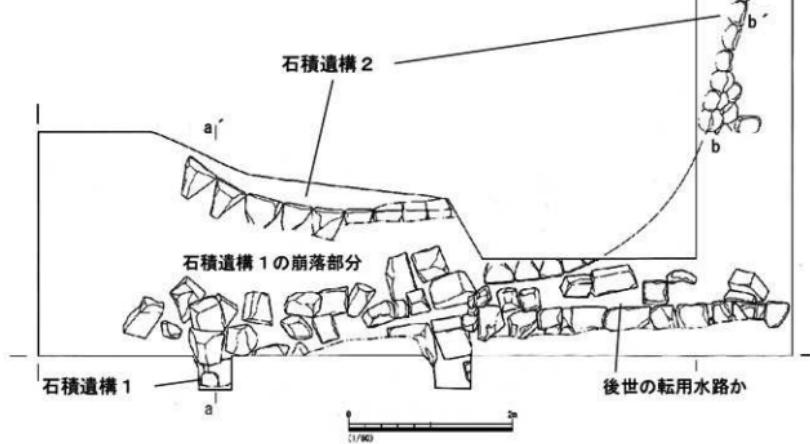
遺物は遺構に関わると考えられるものはほとんどなく、瓦片や陶器、鉄釘などが出土してはいるが、それらは後の造成時に廃棄された近代以降の住居の部材である。1点のみ石材にかみ込みように五輪塔の宝珠形頭頂部分(S1)が出土している。風化が激しく情報量は少ないが、考えら



第18図 1区出土遺物(1/5)



第19図 1区石積遺構の断面図 (1/40)



第20図 1区遺構配置図 (1/60)

れるのは蓮堀を含めた陣屋が構築された段階に現在の多度津町大通り極楽橋付近の土地は墓地であったらしく、それらを解体撤去して、陣屋に地均ししていったと考えられる。その際に石材の二次転用として、石積の裏込めとして利用したか、

あるいは解体撤去後に蓮堀付近に移設されていた五輪塔が後の造成段階で蓮堀と同じく崩され、埋没したものではないかと考えられる。どちらにせよ蓮堀構築段階以前の遺物であると考えられる。材質はいわゆる天霧石と呼ばれる現地調達の石材である。多度津町内には中世段階から天霧石を利用し、近世段階にも多用する石材であるため、多度津町内では近世段階では比較的ポピュラーな材料であったと考えられる。

石積遺構 2

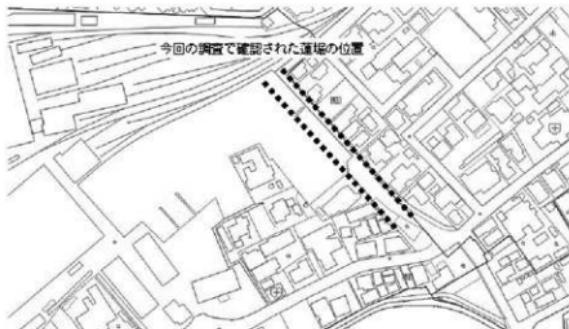
蓮堀の石材と想定される石積遺構 1 の東側に、明らかに石材の新しい別の石材、そして天端に三和土を施した用途不明の石積遺構があった。

石材は青木石系の間知石が利用されている。石積みは谷積（第 22 図）で

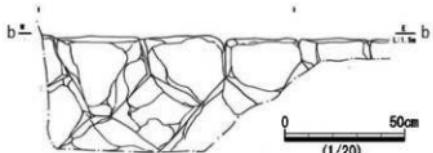
ある。また石材の接地面は三和土で接着されている。少なくとも 3 列以上構築されていると想定され蓮堀と直交する形で一列、並行する形で 1 列確認されている（第 20 図）。遺物はこの遺構に直接関係するものは確認されていない。

2 区

2 区は多度津藩陣屋の御殿や新御殿の南側、練武場と藩校「自明館」の西側、想定される武器庫の東側に位置する（第 15 図）。この場所は現存する絵図上に施設名等の記載が無いため、どのような施設があったのか不明な場所である。ただし家中屋敷と陣屋を区分する蓮堀の陣屋側の南面であり、周辺には藩米庫などがあったことから、多度津藩に直接的に関係する何らかの施設があったのではないかと考えられている。



第 21 図 蓮堀想定位置図



第 22 図 石積遺構 2 立面図 (1/20)

0 50cm
(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

(1/20)

b b'

1/20

50cm

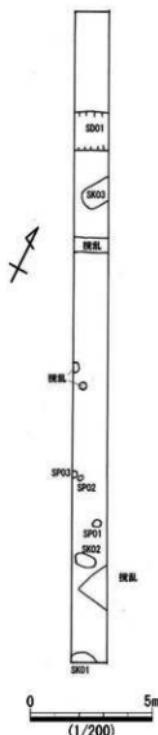
遺構は調査区南端には SK01 がある。大正昭和時代の造成土上端から埋納した大甕が入っており、これは土壤の状況から昭和期のノツボであると考えられる。また SK02 と柱穴 3 基は上位層に包含層が無いが、埋土に僅かながら近世の土師質土器を確認していることから、近世段階の遺構であると考えられる。遺構面上層に被覆する包含層には近世でも後期から幕末、明治初頭頃の遺物が出土しているため、SK03 と SD01 も近世段階の遺構であると考えられる。

遺物は遺構面上端部と包含層から出土している。瓦が多く、特に 39 などの軒丸瓦は形状から古いものは江戸時代後期、19 世紀前半の文政期に多度津藩陣屋が敷かれた時期の所産であると考えられる。また出土した軒丸瓦の文は基本的には連珠三つ巴文だが、38 は連珠の中に台形と菱形の意匠を施した特殊なものである。その特徴からこれに関しては京極氏が丸亀を治める以前の山崎時代に使われていたものではないかと考えられる。そのため陣屋設置前の丸亀藩内で多度津京極藩の政府があった時代の施設に山崎時代から引き継ぎ利用されていたものを、陣屋設置段階にさらに多度津に持ってきて再利用したものではないかと考えられる。多度津藩で使用される瓦の多くは丸亀藩内の瓦町において製作されたものが多く使用されている。そのため丸亀から建築部材を持っていくことは珍しいことではなかったのでないだろうか。

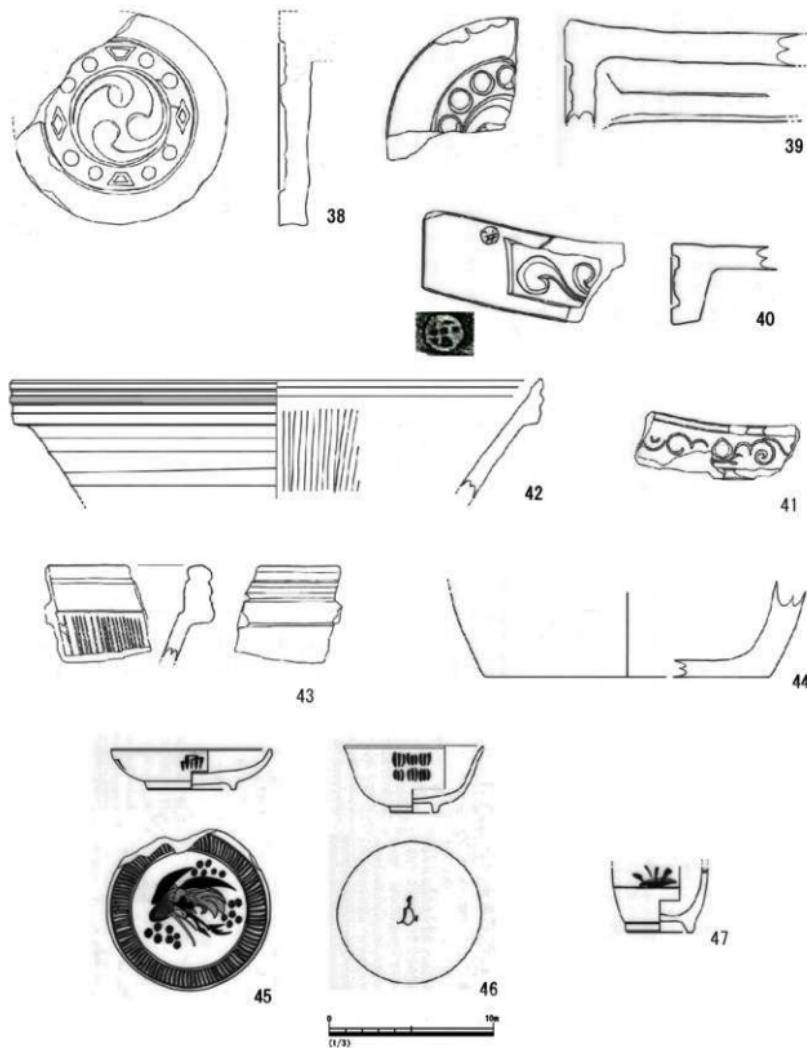
40・41 は軒平瓦である。40 は葛葉文で、その形状から幕末期の所産であるが、刻印に「@」とあり、多度津の瓦屋「三木屋兵蔵」によるものであると考えられる。41 は宝珠文で、焼成が 38 と酷似しており、江戸時代前半以前のものを再利用したものではないかと考えられる。

またそのほか 42 は堺産の擂鉢で、43・44 はともに備前焼の擂鉢と壺である。45・46・47 は瀬戸焼の磁器である。いずれも幕末期の所産であると考えられる。そのほか土師質土器片、肥前系陶器、肥前系磁器、美濃陶器、などの陶磁器片、平瓦、丸瓦の瓦片、用途不明の鉄滓、遺存体として貝殻も出土した。しかしそれらの出土遺物では特徴的な用途を示す物が確認できなかったため、調査範囲にあった遺構がどのような性質の施設であったかの推定は困難である。出土遺物の粗密から推定すると SD01 周辺から瓦が多く出土していることから、この溝状遺構は土塀などに並行した溝があった可能性も考えられる。

そのため少なくとも 2 区に関しては多度津藩陣屋があった頃に藩に直接的に関わる塀を



第 23 図 2 区遺構配置図 (1/200)

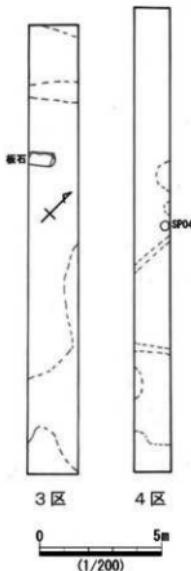


第24図 2区出土遺物 (1/3)

持った何らかの施設があったことは推定できる。

3・4区

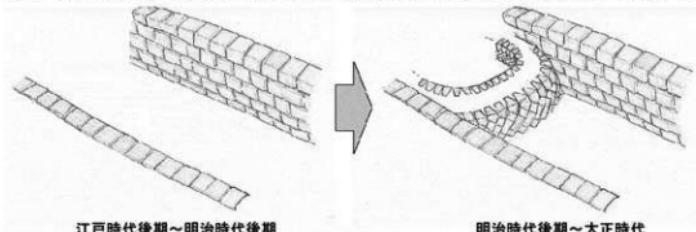
層序でも述べたように3区と4区の堆積はほぼ廃土によるものに覆われていた。そしてこれらの調査区は多度津藩御殿があったと想定されている場所である。結論から述べるとこの2つ調査区からは御殿そのものの存在を確認できる遺構の検出はできなかった。調査区全体にわたって図上の破線で表しているところは腐植土と造成土の下位に廃棄された建材等による搅乱で、遺構は3区に用途不明の板石、4区の柱穴1基のみである。そのため何らかの建物あるいは柵列のようなものが設置されていた可能性は考えられるが、大規模な御殿の存在を確認できる物ではない。出土遺物に関しては搅乱層の中に一部近世のものではないかと考えられる瓦・陶磁器・土師質土器などが出土しているが、搅乱層の下位に遺物包含層は残っていないかった。搅乱層の下位にはベースである砂質の強い砂礫層が続くのみである。そのため今回の調査対象地した3・4区付近の遺構は搅乱によって消滅しており、御殿の痕跡はさらに南の位置にのみ存在するかもしれない。



第25図 3・4区遺構配置図 (1/200)

第4節 石積遺構の変遷について

1区で検出した石積遺構から蓮堀の変遷についてである。今回検出した石積遺構2については、明治初頭、昭和初期の古地図や古い航空写真等では確認できない遺構である。そのた



第26図 石積遺構1と2の変遷模式図

めこの遺構は古地図や古写真の無い、明治時代後期～大正期に造られた構造物であると考えられる。また周辺での聞き取り調査でこの場所には池があったという話を周辺の古くからの住民から聞き取ることができた。そのためこの石積遺構は明治後期～大正時代にかけて造られた池の護岸である可能性が考えられる。そして上端のレベルが検出した蓮堀の石材よりも低い位置にあるため、蓮堀の掘方を利用して、その内部に石積を構築していったと考えられ、その段階（大正時代）ではまだ蓮堀の石積の一部は顕在であったと考えられる（第26図）。後の航空写真では国鉄多度津工場の工場長の宿舎が建てられており、その段階では完全に蓮堀は失われているため、石積遺構1と2の最終的な埋没時期は同じ段階（大正時代末期以降）であったのではないかと考えられる。

第5節　まとめ

今回多度津藩陣屋の施設に関係するいくつかの場所を確認したが2～4区に関しての御殿や武器庫の痕跡は今回の調査では確認することはできなかった。しかし少なくとも1区に関しては蓮堀の石積みが検出されたことによって、堀の構造の一部を把握することができた。

これまで「多度津藩陣屋跡」の範囲内には、残存する建造物は藩米庫と堀の一部ではないかと言われている石材が一部露頭しているのみである。また武家屋敷のあった家中は地割が残ってはいるが、顕在化しているものは蔵一つと、林家の家老屋敷、通称「東御殿」にあった長屋門の基礎石と武家屋敷一軒、五十軒長屋の一部のみであった。しかし今回の調査で、原位置が保たれていないもののが多かったが、一部当時の蓮堀が残っている箇所があることが分かり、既存の露頭した堀の石材とされていたものも、今回検出した堀の対面の石積であることが分かった。先にも述べたように当時の面影を残す、建造物などは現在の多度津藩陣屋跡内においてはほとんど残ってはいないが、現在も地表下においては、その痕跡がまだまだ残存している可能性を見出すことができたのではないだろうか、特に多度津藩は、陣屋成立後の絵図は残っておらず、多度津藩日記や富井家文書などの古文書と、文化12年に作られた家中屋敷地図、つまり陣屋が設置される以前の設計図からの類推によるものであるが、今回の調査の結果から少なくとも、陣屋と武家屋敷を分けていた堀の位置に間違いはないことは分かった。江戸時代に讃岐にあったように政府の痕跡が色濃く残っている高松藩や丸亀藩とは違い、その痕跡が多くはないとされてきた多度津藩であるが、埋蔵文化財を古文書や絵図を補完することで、その姿が今後もさらに明らかになっていくことのではないだろうか。

第5章 五十軒長屋で採集された瓦について

第1節 概要

周知の埋蔵文化財包蔵地「多度津藩陣屋跡」から東側の地域は、江戸時代後期には武家屋敷群が広がっている地域で、現在の地名もそれに因んで「家中」と呼ばれる。現在では当時の武家屋敷は1件のみ、家老屋敷の長屋門の基礎石と蔵が一棟、あとは下級武士用の長屋（五十軒長屋）が部分的に残るのみの地域である。ただしこれらの地域も広義での「多度津藩陣屋」に關係する地域であると考えられる。今回、五十軒長屋（第15図）に相当する場所で採集した瓦群を掲載する。対象とする資料は25点（軒丸瓦14点、軒平瓦1点、丸瓦10点）である。

第2節 瓦について

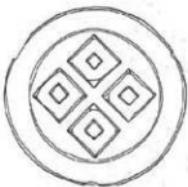
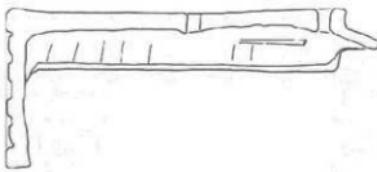
軒丸瓦の文様は48～58の11点が隅立て四ツ目文、60・61の2点が連珠三つ巴文、59が菊花文である。隅立て四ツ目文は多度津京極藩の家紋である。採集した五十軒長屋は多度津藩の家臣の中でも下級武士の住居であるため、その建物に藩主の家紋が載っている瓦を葺くことは考えにくいため、元々は、陣屋の政庁関係施設で使用していたものの二次転用か余剰分を予備の瓦として取っていたものが残っており、今回採集されたのではないかと考えられる。製作年代は48～58のものはすべて瓦内面の調整がケズリ中心の簡素なものである。さらに刻印の「@」の文字が、丸亀城周辺で出土するものと同様のものが見られることから、多度津藩陣屋が成立した天保期に制作されたものではなく、幕末期に丸亀の瓦町で製作されたものであると考えられる。連珠三つ巴文の軒丸瓦に関しては巴の形状からこれも同時期の幕末期のものであると考えられるが、刻印などが不明で、製作された場所は不明である。59に関しても同様である。

62は軒平瓦で、文様は葛葉文である。その形状から、これもほとんど摩耗しているが、刻印に「@」とあるため、幕末期に丸亀の瓦町で製作されたものだと考えられる。

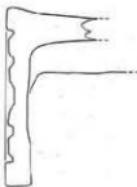
丸瓦は63・66～70・72が丸亀の瓦町、刻印「@」が確認される。65は刻印「@」とあり、これについての製作地は不明である。また64については刻印に「タドツ三木屋兵藏」とあり、多度津藩内で製作されたものである。三木屋兵藏の瓦は幕末のみならず、近代にも使用されるが、今回のものに関しては幕末まで遡ってもよいように思われる。ただし三木屋兵藏の瓦は多度津町内で使用されるもののなかで確認されているものは武家屋敷にではなく、町内に残る町屋建築に用いられている。そのため陣屋の施設に直接使われていたものではない可能性もある。残りの71は隅棟で使用される比較的大型のものであるが、刻印が見られないため、製作場所等は不明である。



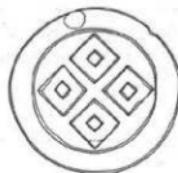
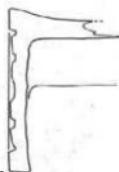
48



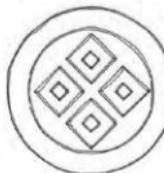
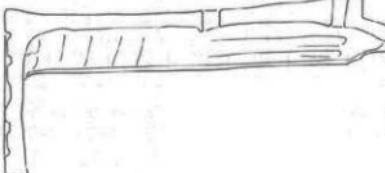
49



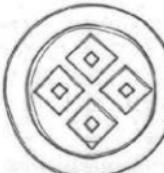
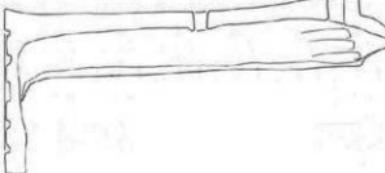
52



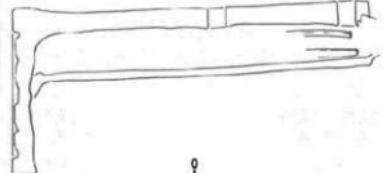
50



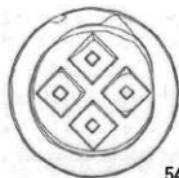
51



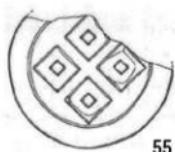
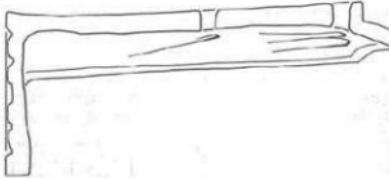
53



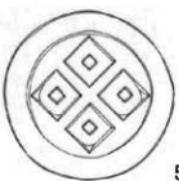
第27図 五十軒長屋採集瓦① (1/4)



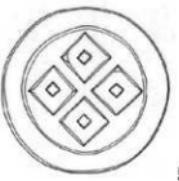
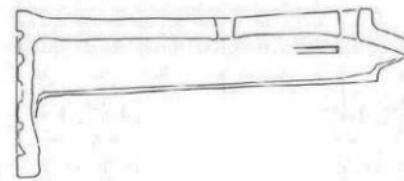
54



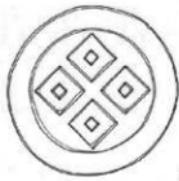
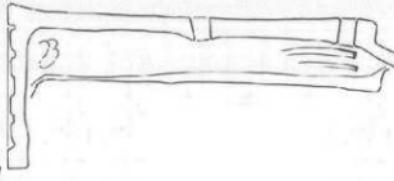
55



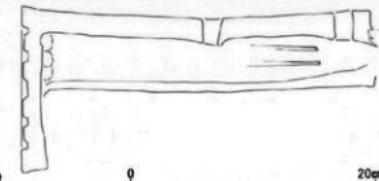
56



57



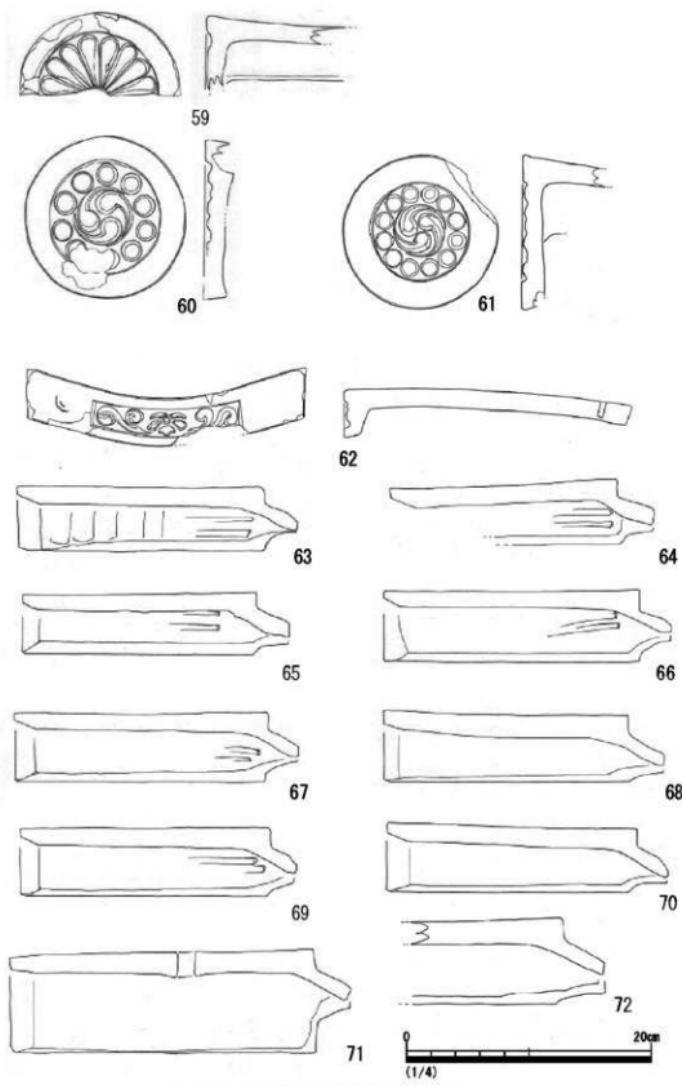
58



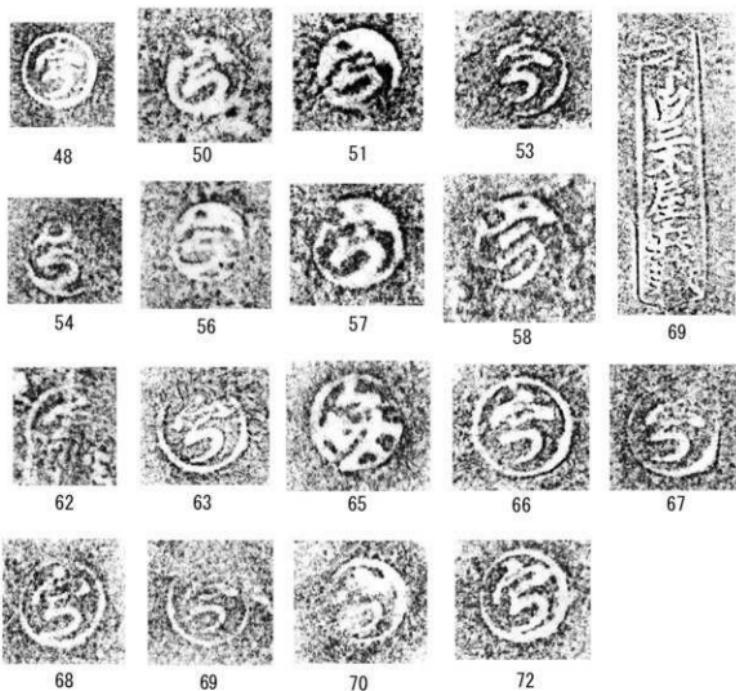
0
(1/4)

20cm

第28図 五十軒長屋採集瓦② (1/4)



第29図 五十軒長屋採集瓦(3) (1/4)



第30図 五十軒長屋探集瓦の刻印拓本

第3節 まとめ

以上のように今回採集した瓦は、その多くが製作時期は幕末期のもので、製作場所の多くは丸亀の瓦町である。そのためこれらの資料から、多度津藩が江戸時代後期に陣屋を設置し、藩として独立したにもかかわらず、幕末期になっても、親藩である丸亀藩に依存していたということが推定できる。ただし、単純に依存していたわけではなく、多度津藩領内にも瓦を製作する工房があり、町内の同時期の町屋など商家で用いられているもの多くは多度津三木屋兵蔵のものが多く占めている中、それを利用せず、丸亀から仕入れていたことは、武家屋敷と町屋の瓦の仕様を明確に分けるということも念頭に置かれていたのではないかと考えられる。

遺物觀察表

笠屋遺跡

多度津藩陣屋跡

地點番号	遺構名	写真図版	基盤	法面 (cm)	出土	色調		構成	外壁 内面	堆積状況	備考
						内面	外壁				
38	12 軒丸瓦		12.4 2.0		NB 灰色	NB 灰色	IDY6/1 灰色	やや平凸 ナデ	山崎時代のものか? 墓 標三つ式瓦の出現		
39	軒丸瓦		12.8 2.0 13.2		IDY5/1 灰色	IDY5/1 灰色	2SY7/2 黄褐色	良好 ナデ ツリ	山崎三つ式瓦		
40	12 軒平瓦				NH 灰色	NH 灰色	2SY7/1 黄褐色	良好 ナデ ツリ	良好 ナデ ツリ	1/2 軒平瓦 山崎時代のものか? 墓 標三つ式瓦の出現	
41	12 軒平瓦				1mm粒長石 磷倉	IDY6/1 灰色	IDY6/1 灰色	1D97/2 に少し黄褐色	やや平凸 ナデ	次片 宝鏡文	
42	壁脚 壁脚 壁脚 壁脚 壁脚 壁脚 壁脚		口径 22.6		2.5mm/4 に少し黄褐色 2.5mm/4 黄褐色(表面) 2.5mm/4 黄褐色(裏面)	2.5mm/4 黄褐色	2SY6/6 棕褐色	良好 ナデ ツリ	口縁部 1.5cm 傾斜		
43					2.5mm/2 黄褐色	2.5mm/2 黄褐色	2SY6/6 棕褐色	良好 ナデ ツリ	口縫		
44	12 棒瓦 (裏面)		底板 12.2		1mm粒長石 磷倉 1mm粒長石 磷倉	SYR5/4 雪白色	SYR5/4 に少し黄褐色	NH 灰色	良好 ナデ ツリ	底板 1/4	
45	12 小皿 (裏面)	52	口径8.8 底板4.4		GDR6/1 白色	GDR6/1 白色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	ほぼ完全 底地等 売戸 傾斜なし		
46	12 小皿 (裏面)	41	口径8.3 底板3.3		NH 灰白色	NH 灰白色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	完全 底地等 売戸 傾斜なし		
47	小錐 堆積		底板 13.0	4.0	NH 灰白色	NH 灰白色	2SY7/1 白色	良好 ナデ ツリ	底地等 売戸 傾斜なし		

地點番号	遺構名	写真図版	基盤	法面		堆積状況	備考
				高さ(cm)	幅さ(cm)		
S1	SD01	12	五輪塔 (宝篋)	高 21.6	底板 15.7	4.5kg 注文宛	材料、底地等(天井 石)、鉢分の沈者 等(アラフ)。

五十軒長屋

地點番号	写真図版	基盤	法面 (cm)		出土	色調		構成	法面		堆積状況	備考	
			内面	外壁		内面	外壁		内面	外壁			
48	軒丸瓦		軒丸瓦 13.5	13.3 31.5	IDY5/1 灰色	IDY5/1 灰色	2SY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
49	軒丸瓦		軒丸瓦 14.7 11.8		NH 灰色	NH 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
50	13 軒丸瓦		13.0	31.4	1mm粒長石 9.4	IDY5/1 灰色	IDY5/1 灰色	IDY7/1 黄褐色	やや平凸 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
51	軒丸瓦		13.0	31.4	1mm粒長石 9.4	SYR5/4 灰色	SYR5/4 灰色	SYR5/4 灰色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
52	軒丸瓦		13.0	31.5	堆積 9.4	IDY5/1 灰色	IDY5/1 灰色	2SY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
53	軒丸瓦		13.0	31.5	堆積 9.4	IDY5/1 オリーブ黄色	IDY5/1 灰色	IDY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
54	軒丸瓦		13.0	31.5	IDY5/1 オリーブ黄色	IDY5/1 灰色	IDY5/1 灰色	NH 灰白色	やや不整 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
55	軒丸瓦		13.0	2.9	IDY8/1 灰色	IDY8/1 灰色	2SY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
56	13 軒丸瓦		13.0	31.8	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
57	13 軒丸瓦		13.0	31.7	IDY8/1 灰色	IDY8/1 灰色	IDY8/1 灰色	NH 灰白色	やや不整 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
58	軒丸瓦		13.0	31.0	堆積 8.0	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
59	13 軒丸瓦		13.2	31.0	2SY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	IDY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	ナデ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
60	13 軒丸瓦		13.0	2.9	IDY5/3 オリーブ黄色	IDY5/3 オリーブ黄色	2SY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	ナデ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
61	13 軒丸瓦		12.75	2.9	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	IDY7/1 灰白色	良好 ナデ ツリ	ナデ ヘラケツリ 11.12	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
62	13 軒平瓦		42	22.8 23.4 1mm粒長石 堆積	IDY5/1 オリーブ黄色	IDY5/1 オリーブ黄色	2SY8/1 白色	良好 ナデ ツリ	ナデ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
63	丸瓦	52	13.3	22.8	IDY4/1 灰色	IDY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	良好 なし ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
64	丸瓦	54	13.6	21.8	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	良好 ナデ ツリ	日削	底地等 多摩町内 底地等 丸丸瓦	底地等 多摩町内 底地等 丸丸瓦	底地等 多摩町内 底地等 丸丸瓦	
65	丸瓦	49	13.0	21.8	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	IDY7/1 灰白色	良好 ナデ ツリ	ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
66	丸瓦	47	13.3	23.5	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	IDY7/1 灰白色	良好 ナデ ツリ	ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
67	丸瓦	46	14.6	23.2	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	NH 灰白色	ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
68	丸瓦	48	13.9	23.1	2SY7/3 泥質灰 と SYA1/1 灰色、泥質灰	2SY7/3 泥質灰 と SYA1/1 灰色、泥質灰	2SY7/2 泥質灰 と SYA1/2 灰色、泥質灰	NH 灰白色	やや不整 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
69	丸瓦	46	13.6	22.9	2SY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
70	丸瓦	48	12.5	23.0	2SY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	2SY4/1 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
71	丸瓦	42	19.0	27.9	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	2SY5/1 灰色	NH 灰白色	良好 ナデ ツリ	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦	
72	13 丸瓦	46		14.8	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	IDY4/1 灰色	NH 灰白色	ナデ ツリ	2/3	底地等 丸丸瓦 底地等 丸丸瓦		

写 真 図 版

写真図版（笠屋遺跡）



図版1 SD01 北から



図版2 SH01 北から



図版3 調査区全景 北から

写真図版（笠屋遺跡）



1



2



3



4



5



7



8



9



10



11



13



14

図版4 SD01 出土遺物①

写真図版（笠屋遺跡）



17



18



19



20



21



22



23



24



25



27



28



30



31



32



35

図版5 SD01 出土遺物②

写真図版（多度津藩陣屋跡）



図版 6 1区 石積遺構 1南半



図版 7 1区 石積遺構 1北半と2北半



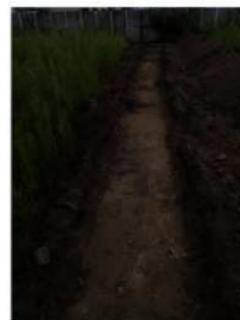
図版 8 1区 石積遺構 2南半



図版 9 2区 全景 北から



図版 10 3区 全景 北から



図版 11 4区 全景 北から

写真図版（多度津藩陣屋跡）



38



40



41



45



46



S1

写真図版（五十軒長屋）



50



56



57



59



60



61



62



72

報告書抄録

ふりがな	かさやいせき たどつはんじんやあと							
書名	笠屋遺跡 多度津藩陣屋跡							
副書名	平成30年度から令和元年度に多度津町内で実施した遺跡調査報告							
巻次								
シリーズ名	多度津町内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	2							
編著者名	白木亨							
編集機関	多度津町教育委員会							
所在地	〒764-8501 香川県仲多度郡多度津町栄町1-1-91 Tel : 0877-33-0700 Fax : 0877-33-0600							
発行機関	多度津町教育委員会							
発行年月日	西暦2020年3月31日							
総頁数	54							
そりがな 所収遺跡名	そりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
かさやいせき 笠屋遺跡	かがわけんなかたどぐんたどつちよりおおさ 香川県仲多度郡多度津町大字 じよくあざかわや 庄小字笠屋521-1	37404	0059	34° 16' 14"	133° 46' 2"	20180531～ 20180611	922m ²	宅地造成
たどつはんじんやあと 多度津藩陣屋跡	かがわけんなかたどぐんたどつちよりおおさ 香川県仲多度郡多度津町大通 り1-31、122-5、249-2	37405	0106	34° 27' 44"	133° 75' 16"	20190110/2 0190925～ 20190927	90.1m ²	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
笠屋遺跡	集落跡	弥生時代後期～古墳時代前期	堅穴住居 溝状遺構	弥生土器 土師器			集落の南東端の境界溝	
多度津藩陣屋跡	城館跡	近世～近代	石積遺構 溝状遺構・柱穴	瓦	陶磁器	鉄製品	石製品	多度津藩陣屋に関連する遺構群

多度津町内遺跡発掘調査報告書 2

笠屋遺跡
多度津藩陣屋跡

平成 30 年度から令和元年度に
多度津町内で実施した遺跡調査報告

令和 2 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 多度津町教育委員会

香川県仲多度郡多度津町栄町 1-1-91

印刷 (有) 西山印刷所

